

(4) 長野市長沼城跡にみる中世城館内での鍛冶活動

熊木奈美

1 はじめに

長沼城跡は長野市穂保地区に所在する遺跡で、2021年度から発掘調査が行われている。2023年度の調査では二の丸および三の丸推定地の遺構分布や、土壘・堀の位置が明らかになり、「幻の城」とされてきた長沼城の姿が少しずつベールを脱ぎ始めている。

本稿では、長沼城跡において本年度にみつかった鍛冶炉と推定される遺構と、出土した鍛冶関連遺物の内容およびその分布について紹介する。

2 長沼城跡の鍛冶炉および鍛冶関連遺物

鍛冶炉と推定される遺構（SF21）は長沼城跡二の丸推定地でみつかった。平面形は長軸約100cm、短軸約50cmのひょうたん型を呈する土坑で、底部に長軸約14cm、短軸約10cmの焼土範囲を持つ（図1）。掘り込みは4cm程度と浅く、覆土に大量の炭化物を含んでいる。

焼土を検出した時点で鍛冶炉である可能性を考慮し、覆土3,900gを採取した。5mm、1mm、0.5mmメッシュおよび磁石による選別を行ったところ、鍛造剝片および粒状滓3g（図2）、炭化物18g、着磁遺物21g、そして坩堝片3点や銅滓を得ることができた。鍛造剝片と粒状滓は鉄製品を作る工程（小鍛冶）において、熱した鉄を叩くことによって生成されるものであり、このことからSF21が小鍛冶を行った鍛冶炉であると判断した。

2021年から2023年度の発掘調査において、鍛冶炉と推定されている遺構はSF21のみであるが、長沼城跡ではそのほかにも鉄滓、銅滓、羽口、坩堝など小鍛冶を含む鍛冶活動に関する遺物が多数出土している。鉄滓には炉壁、椀形滓、分類不能のものがあり、累計で322点に及ぶ。また鉄滓との判別が難しいが、銅滓も出土している。羽口は2021年度に1点出土している。

特筆したいのは坩堝の出土である。小さい破片も含めると合わせて15点が出土しており、そのう

ち6点に銅滓が付着している。坩堝の元となる土器には、手づくねとカワラケの転用の両方が確認できる。このことから、長沼城内で小鍛冶だけでなく銅製品の加工も行われていたことがうかがえる。

鉄滓等の鍛冶関連遺物は調査区内に普遍的に分布しているわけではなく、二の丸の掘立柱建物等の周辺に集中して出土している（図3）。特に二の丸北郭部分（図3左側）での出土が多い。

3 県内中世城館跡の鍛冶関連遺物・遺構

ここまで、長沼城跡出土の鍛冶関連遺構及び遺物を紹介した。本項では長野県内中世城館跡の鍛冶関連遺物・遺構について類例を挙げ、長沼城跡との比較を試みたい。

長野県内の中世城館跡のうち、鍛冶関連遺構お



図1 SF21 焼土検出状況



図2 SF21出土鍛造剝片
(左) と粒状滓 (右) (一目盛り 1mm)

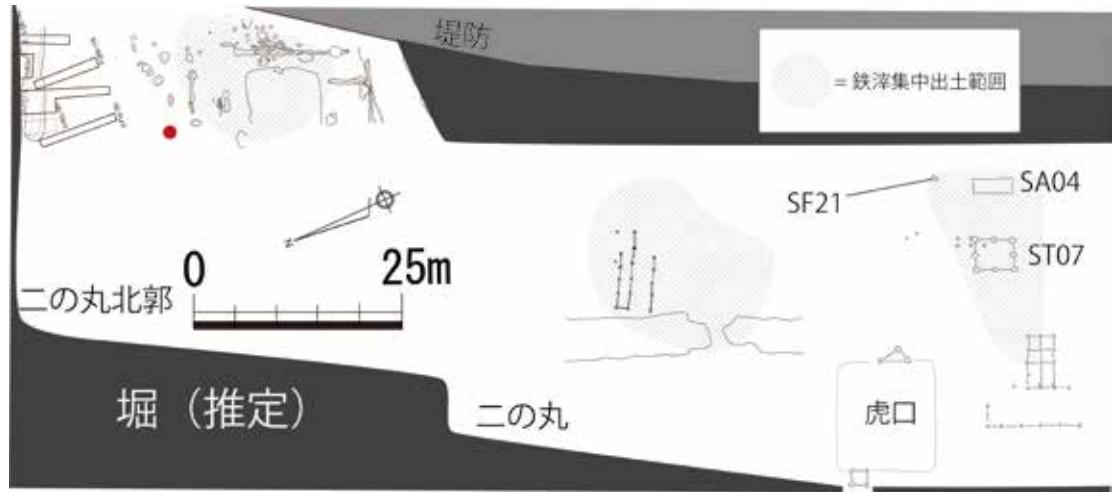


図3 遺構位置及び鉄滓分布概略図

より遺物の出土が確認できたのは8遺跡（表1）だが、紙幅の都合上紹介するのは本稿で触れる遺跡に留めたい。また、浅学のため見落としている遺跡もあると思われる。

・金井城跡 佐久市大字小田井

金井城跡では1987～1988年に行われた発掘調査において603棟の竪穴建物がみつかっている。そのうち第63号竪穴建物址は床中央に地床炉と下床が被熱した張り出し部を備えており、多量の鉄滓も出土しているほか、271号竪穴建物址からは鉄滓と羽口が出土している。また、鍛冶遺構と考えられる土坑もみつかっている。出土陶磁器の年代や文献から、金井城の主な使用期間は16世紀中であると考えられる（佐久市教育委員会1991）。また、河西克造によると縄張りの特徴から武田氏的性格が抽出できるという（河西1991）。

・殿村遺跡 松本市大字会田

鍛冶と直接関連する遺構は検出されていないが、竪穴建物および整地土から埴堀が5点出土している。時期は15世紀後半～末と推定され、埴堀に緑青等が付着していたことから、銅鍛冶がおこなわれるような工房空間があったと考えられる（松本市教育委員会2018）。

・大草城跡 中川村大草

1985年に行われた発掘調査において、二の丸の北郭が鍛冶場として使用されていたことが判明した。年代は出土遺物から14～16世紀と考えられる（中川村教育委員会1990）。

遺跡名	所在地	年代	鍛冶遺構	鍛冶関連遺構
長沼城跡	長野市穂保	16世紀	1	鉄滓、羽口、埴堀
栗田城跡	長野市栗田	14～15世紀		鉄滓
塙田城跡	上田市前山	16世紀	2	鉄滓、羽口、埴堀
金井城跡	佐久市小田井	16世紀	2	鉄滓、羽口
殿村遺跡	松本市会田	15世紀後半		埴堀
堀の土居館跡	辰野町沢底	15世紀前半	1	鉄滓、鉄挺状鉄製品
大草城跡	中川村大草	14～16世紀	1	鉄滓、羽口、埴堀、鋳型
北本城々跡	飯田市座光寺	細分不明		鉄滓、羽口

表1 長野県内城館遺跡の鍛冶関連遺物・遺構

・表町遺跡 上水内郡飯綱町牟礼

矢筒城の城下町遺跡として知られている。城館遺跡ではないが、遺跡のある牟礼地区は長沼地区と同じく太田荘に属しており、1221年に地頭となった島津氏の支配下にあった（牟礼村1997）ため、長沼城跡との比較に適していると考え紹介する。

表町遺跡では、2009年に行われた飯綱町の調査において複数の炉床を伴う掘立柱建物跡（SB05・06）が検出されている。建物の周辺から鉄滓・羽口が複数出土していることからも、SB05・06は鍛冶工房跡と考えられる。工房の存続時期は15世紀後半～16世紀と推定されている（笛澤2014）。また、2005～2008年にかけて行われた長野県埋蔵文化財センターの調査でも、鍛冶関連遺物が多数出土しており、その時期は16世紀前半と考えられている（長野県埋蔵文化財センター2009）。

概観すると14～16世紀、つまり室町から戦国時代にかけて城館内やその付近で鍛冶が行われる

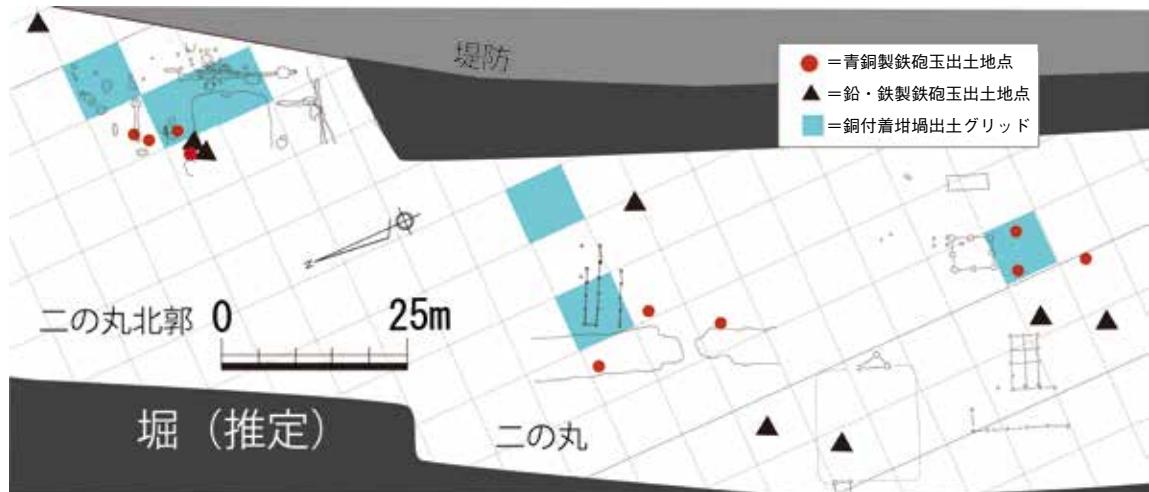


図4 銅付着埴堀及び鉄砲玉出土地点概略図

ケースがあったことがわかる。また、16世紀に鍛治工房が運用されていたと考えられる金井城跡や大草城跡は武田氏の影響が強い土地だが、近い時期に島津氏の支配下にあった表町遺跡では城下町に鍛治工房があったことを考えると、支配者もしくは城の機能により鍛治職人の活動場所が異なっていたことも考えられる。

4 長沼城跡鍛冶痕跡についての考察

長沼城跡出土鍛冶炉の位置と機能

初めに、長沼城跡でみつかった鍛冶炉が城内でどのような位置にあったか考えたい。鍛冶炉(SF21)は16世紀の柱穴列(SA04)および掘立柱建物跡(ST07)の北東に位置し、すぐ東側には内堀があったと考えられる(図3)。SF21からは年代のわかる遺物が出土していないため、柱穴列や掘立柱建物と同時期のものかははっきりしないが、SF21は建物に伴った鍛冶炉である可能性がある。また、鍛錬鍛冶遺物と埴堀という铸造関連遺物が同時に出土していることから、小鍛冶も铸造も同じ炉で行っていたことがわかる。

(2) 銅滓が付着した埴堀について

先述のように長沼城跡では埴堀が出土しているが、城内で銅の铸造が行われていたことにはどのような意味があるのだろうか。同じく銅滓が付着した埴堀が出土しているのは松本市殿村遺跡であるが、铸造の場所や目的はわかっていない。遺構と伴う例については、他県になるが山梨県甲州市勝沼氏館跡の工房跡がある。そこでは館の内郭部

から水路と水溜を伴う礎石建物跡(SB20)がみつかり、水溜の中から多量の埴堀(報告書では溶着物付着土器)が出土している。この埴堀の中には金が付着しているものもあり、金を加工する工房が内郭部にあったと考えられている(甲州市教育委員会生涯学習課2010)。また青森県浪岡町浪岡城跡では埴堀のほか鐸や切羽の铸造型が出土している(浪岡町教育委員会1985)。浪岡城跡の例から考えると、長沼城でも武具に使用する銅製品が作られていた可能性があるが、令和5年度までの調査では铸造型の類が出土しておらず、出土する銅製品は建具の装飾と考えられるものが多い。考えられるとすれば鉄砲玉の铸造であろうか。長沼城跡では現在18点の鉄砲玉が出土しているが、そのうちの半分には青銅が含まれている。鉄砲玉は一般的に比重の重い鉛を主成分としているが、山梨県上野原町(現上野原市)長峰砦跡の発掘調査で青銅製の鉄砲玉が出土した例が存在する。山梨県教育委員会がこの鉄砲玉の成分を調べたところ、青銅古銭の配合比に近いものであるという結果が得られている。山梨県埋蔵文化財センターの出月洋文はこの結果を受け、富士御室浅間神社の文書に鉄砲玉の铸造材料として悪銭を納めるよう指示する内容があることから、悪銭を鉄砲玉の材料にすることが一般的に行われていたのではないかと推測している(山梨県埋蔵文化財センター2000)。

翻って、長沼城跡における青銅製鉄砲玉について

て考えたい。埴堀と青銅製鉄砲玉の出土地点（図4）を見てみると、鉛・鉄製の鉄砲玉に比べ、青銅製の鉄砲玉が埴堀出土区域付近に偏って出土していることがわかる。鋳型が出土していないため断定することはできないが、長沼城内で何らかの銅製品が作られていたことは確実であり、その中に鉄砲玉が含まれていた可能性もあるのではないだろうか。

5まとめ（今後の課題）

ここまで、長沼城跡でみつかった鍛冶炉について類例を交えて紹介した。最後に今後の課題を列举してまとめとする。

・ほかの鍛冶関連遺構の有無

今回はSF21のみを対象としたが、これまで調査した遺構の中にも鍛冶関連遺構が存在すると思われる。特に埴堀や鉄砲玉が多く出土する二の丸北郭の内容には注視したい。

・SF21の役割

SF21とほかの遺構の位置関係等については先述したが、この遺構でどのような鉄製品を製作していたのかはわからなかった。SF21が建物の内部ではなく外側でみつかったことや、炉床と掘り込み以外に石囲い等の構築物がないことを考えると、本格的な工房というよりは仮作業場的な印象を受ける。古鉄の修理や普請のための釘づくり等が考えられるが、長沼城跡で出土した鉄製品を分析すればよりはっきりしたことがわかるだろう。

・鍛冶活動の主体者と時期

笹本正治は、武田氏が佐久の龍雲寺に宛てた文書から武田氏と職人の関係について考察している。この文書は龍雲寺が再建のために小県郡の番匠（木工職人）の派遣を依頼、それに武田側が応じ、長沼城に在城しているものに断って派遣を許すという内容のものである（笹本2021）。氏はこれについて「武田氏は小県郡や佐久郡の番匠全体を掌握」（笹本1990）し、「おそらく龍雲寺が番匠を使おうとしたとき、武田氏が長沼城の築城に動員していたため、雇うことができなかつた」（笹本2021）と考察している。つまり長沼城の築城のために遠隔地から職人を連れてきているというこ

とになり、その動員された中に鍛冶職人も存在した可能性がある。今回みつかった鍛冶炉が武田の時代のものであれば、遠隔地から連れてこられた職人が使用したものかもしれない。しかし、先述した通り鍛冶炉から年代のわかる遺物は出土しておらず、武田氏以降、もしくは廃城後のものであることも十分考えられる。現段階では単なる憶測にすぎないため、年代や遺構同士の時期差などの検討が必要である。

以上、憶測と課題が多い考察となってしまったが、今後は発掘調査成果の整理や類例の検討などを行い、より詳細な鍛冶活動の実態をとらえていきたい。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1992『北本城々跡』
 飯綱町教育委員会 2014『表町遺跡』
 上田市教育委員会 1978『塩田城跡 第3次発掘調査概報』
 甲州市教育委員会生涯学習課 2010『史跡勝沼氏館跡』甲州市文化財調査報告書5
 佐久市教育委員会 1991『金井城跡第1分冊 遺構編』佐久市埋蔵文化財調査報告書1
 辰野町教育委員会 2000『堀の内居館跡1』
 中川村教育委員会 1990『大草城跡』
 長野県埋蔵文化財センター 2009『西四ツ屋遺跡 表町遺跡』
 長野市教育委員会 1994『栗田城跡（2）』長野市の埋蔵文化財61
 浪岡町教育委員会 1985『浪岡城跡VII』
 松本市教育委員会 2018『長野県松本市殿村遺跡第8次発掘調査報告書・虚空蔵山城跡第2・3・4次発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書231
 牟礼村 1997『牟礼村誌』
 山梨県埋蔵文化財センター 2000『長峰砦跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書168
 河西克造 1991「縄張りからみた金井城の構成と特徴」『金井城跡第2分冊 遺物・考察・写真図版編』佐久市埋蔵文化財調査報告書1 pp.707-713
 神崎勝 2006『冶金考古学概論』雄山閣
 雀田蔵郎 1987『改定 鉄の考古学』考古学選書9 雄山閣
 笹本正治 1990『戦国大名と職人』吉川弘文館
 笹本正治 2021「県立歴史館の武田氏印判状を読む—長沼城と龍雲寺—」『長野県立歴史館研究紀要』第27号 pp.1-19